

埼玉150周年・開館50周年記念

NHK大河ドラマ特別展

青天を衝け

渋沢栄一のまなざし

令和3年3月20日^{土祝}～5月16日^日

埼玉県立
歴史と民俗の博物館
Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

2021年NHK大河ドラマ特別展「青天を衝け」の主人公である渋沢栄一は、新一万円札の肖像に採用されるなど、今注目を集めている埼玉の偉人です。本展では、近代日本経済の基礎づくりを果たした渋沢栄一の実業家としての顔のみならず、福祉・医療・教育・外交など社会実業家としての姿もクローズアップし

ます。また、これまであまり知られてこなかった渋沢栄一と近代画家との交流を紹介するほか、県内に現存する「青い目の人形」全12体を一堂に展示します。ゆかりの作品を通じて、渋沢栄一を育んだ埼玉の風土と営み、そして渋沢の時代へのまなざしを展望します。

このたびNHKさいたま放送局と共催して、NHK大河ドラマ特別展「青天を衝け～渋沢栄一のまなざし～」を開催します。

この展示は、2月から放送が開始されたNHK大河ドラマ「青天を衝け」に連動したもので、これまでの大河ドラマ展のような全国巡回展ではなく、当館の単独開催となります。

ドラマの主人公である渋沢栄一は、今の埼玉県深谷市出身で、令和6年度から発行される新一万円札の肖像に採用されるなど、今最も注目を集めている埼玉の偉人です。また大河ドラマは、第60作の記念作品となり、しかも主人公とともに埼玉県が初めて舞台となる作品です。さらに今年は埼玉県誕生から150年目の節目の年であるとともに、当館が開館して50周年記念の特別展となります。

渋沢栄一は、道徳と経済の合一を説き、彼の著した『論語と算盤』が、現代の経営者に注目されています。展覧会では、その思想を生んだ渋沢栄一の生きざまと時代へのまなざし、彼を育んだ埼玉の風土と営みを紹介します。特に日本の資本主義の父とも呼ばれ、近代日本経済の基礎づくりに果たした実業家としての顔がよく知られています。これにとどまらず、福祉・医療・教育・外交など社会事業家としての姿をクローズアップします。各コーナーの見どころを紹介していきましょう。

プロローグ 原点・血洗島

栄一は、血洗島村に生まれました。地名については、諸説ありますが利根川流域にあるため河川氾濫で地を洗うなどから来たという説もあり、米作には適さなかったともいわれます。栄一の家は「中の家」とよばれる藍玉を商う富裕農家でした。少年期から藍の行商で各地に赴き、商売のノウハウを身近に感じていました。

第1章 転機・一橋家家臣から幕臣へ

やがて血洗島にも時代の風が吹き、栄一たちは攘夷決起を計画しましたが、冷静に判断して未遂に終わりました。

その後、一橋家家臣となって一橋領の摂津(大阪府)や備中(岡山県)の産業振興や農兵募集の任務を成功させ、財政再建の建言も行うなど頭角



血洗島諏訪神社獅子頭(渋沢栄一記念館)

を現しました。やがて慶喜の15代将軍就任により幕臣となったことが栄一の大きな転機となります。さらにパリ万博に赴く徳川昭武に随行し、渡欧して見聞を広めたことは、栄一のその後の人生を決定づける画期となりました。

第2章 改革・明治新政府官僚

明治2年(1869)11月、駿府の栄一に突然民部省租税正そぜいのかみに任じる詔勅が下ります。

新政府では、貨幣制度、税制改革、銀行制度、郵便制度の導入、鉄道敷設など、3年半の役人時代に多くの新制度を導入しました。やがて大蔵省大蔵少輔取扱しょうとなりましたが、大蔵卿の大久保利通と意見が合わず職を辞しました。

第3章 経済・資本主義の礎

栄一が、民間人となって最初に手掛けたのが第一国立銀行の経営です。「国立」は「国立銀行条例に準拠」する銀行という意味で、資本や経営は民間の合本組織です。



二代歌川国輝「東京府下海運橋兜町 第一国立銀行五階造真図」(当館)

ここを手始めとして、洋紙製造のために抄紙会社、また、地元深谷でも日本煉瓦製造会社を立ち上げています。このほか紡績・倉庫・鉄道・海運

・造船・鉄鋼・セメント・ビール・保険・ホテル
・劇場など数多くの会社等を創設、また育成を
し、関係した企業は500社を超え、近代日本の発
展に大きな功績を残しました。

第4章 社会・社会事業に生きる

栄一は、実業家として活躍する一方、早くから
養育院など社会福祉事業にも関わっていました。
古希を前にした明治42年(1909)、多くの企業や
団体の役員を辞任したことで、本格的に社会事業
に関与。福祉、医療、教育などの幅広い社会事業
に目を向け携わっていきました。

また、栄一は財閥を形成しなかったため、所蔵
の美術品などを管理する博物館施設を持ちませ
んでした。そのため、美術品を収集しなかったと
思われていましたが、調査で現在の東京国立博物
館表慶館の開館時に展示された円山応挙の絵や、
後援していた下村観山、飛鳥山邸を飾った橋本雅
邦などの作品が再発見され、栄一の美術へのまな
ざしを知ることができます。

郷土の偉人の塙保己一を顕彰する温故学会の
設立にも尽力しています。



渋沢栄一揮毫扁額(温故学会)

第5章 平和・民間外交

晩年の活動では、企業家時代からまなざしを向
けていた国際平和活動が特筆されます。

元アメリカ大統領グラント将軍やノーベル文
学賞の詩人・タゴールなどを自邸に招待して交流
を深めるとともに、国際連盟協会を設立し、会長
として国際連盟精神の普及に努めました。

また栄一は、日本人移民排斥運動により、日米
の親善と相互理解が必要という考えから、明治41
年(1908)には、アメリカ太平洋沿岸の商工会議
所の実業家を日本に招待。翌年には、アメリカか
ら招待を受け、渡米実業団として全米各地で親善
交流を果たしました。その後も機会あるごとに渡
米して、国際協調を図るためロビー外交を行って

います。

昭和2年(1927)には、排日移民法による関係
悪化を危惧したギュリック博士とともに日米
人形交流事業を行い、アメリカから友情人形、い
わゆる青い目の人形が、日本からは答礼人形が贈
られました。

本展の見どころの一つが、埼玉県に残る青い目
の人形12体すべてを、一堂にご覧いただけるこ
とです。さらに、日本からアメリカへの答礼人形、
ミス埼玉こと「秩父嶺玉子」^{ちちぶねたまこ}を復元し、展覧会で
初お目見えします。



埼玉県に残る青い目の人形12体

エピソード 遺産・論語と算盤

渋沢栄一が、この世を去って90年。経済界で
は、企業倫理が問われる時代となり、再び栄一の
『論語と算盤』が読み直され、道徳経済合一説が
再認識されています。それは栄一自身が、富の追
求には、仁義道徳の必要性を説くとともに実践し
て、現在に続く多くの企業に関与したことから
明らかです。

こうした背景から、大河ドラマの主人公に取り
上げられ、新紙幣のデザインに栄一の肖像が採用
されたといえるでしょう。

展覧会では、このような渋沢栄一の各方面に向
けたまなざしを御覧ください。

(展示担当 杉山正司)

コロナ禍における博物館運営

令和2年を象徴する漢字として日本漢字能力検定協会が発表したのは「密」という文字でした。これは世界中が新型コロナウイルスの猛威にさらされ、感染予防対策として「密」を避ける新しい生活様式が推進されてきたことによるものです。

当館においても、感染拡大防止の観点から令和2年2月29日から臨時休館としていました。その後、5月26日に再び開館してからはスタッフが一丸となり感染予防対策を行ってきたところです。

コロナ禍にあって健康で文化的な生活を営むため皆様が安心して博物館に足を運んでいただけるよう、今回は当館が行う感染予防対策について御紹介いたします。

【来館者受付の新設】

5月の再開以来、当館では入口を正門に限定し南門を閉鎖しております。エントランスホールには新たな受付を設け、全ての来館者に対し「手指のアルコール消毒」と「サーマルカメラによる検温」及び「連絡先の記入」をお願いしています。

また、総合案内等の窓口には飛沫感染対策としてスタッフ手作りのビニールカーテンを設置しました。



(サーマルカメラ等を配置した来館者受付)

【定期的な消毒の励行】

入館時だけではなく、展示室やミュージアムショップの随所に消毒用アルコールを配置し来館者の皆様に御利用いただいています。

また、休憩コーナーの椅子や展示室の手すりなど皆様が手を触れる箇所については定期的な消毒作業を行っております。展示資料への影響から広域での消毒噴霧等ができないこともあり、日々スタッフが丁寧に拭き掃除をしています。



(図録等閲覧コーナーに設置した消毒用アルコール)

【館内の換気と収容人数の制限】

当館の空調設備は、常に外気を取り入れながら稼働させています。換気量等を考慮し館内における収容人数の制限を設け、来館者数が上限を超えることのないよう確認を行っています。ミュージアムショップのカフェでは机と椅子の数を減らし、対面になることがないように配置しました。

また、講堂や講座室を利用する際の注意事項として新たに感染拡大防止ガイドラインを設定しました。収容人数の減により今までどおりの規模でイベント等を開催することが難しくなっている現状ですが、皆様には換気や消毒などガイドラインに沿った利用に御協力いただいています。



(座席を間引いたミュージアムカフェ)

12月24日からは2度目の臨時休館となりましたが、現在(3月上旬時点)皆様を笑顔でお迎えできるよう再開に向けた準備を行っています。来館の際には、コロナ対策という面からも館内を御覧いただけますと幸いです。

(施設担当：佐藤美絵)

博物館ボランティア活動の新型コロナ対策

当館では、展示解説と体験学習、2種類のボランティアが活動しています。令和2年度は、下記のとおり新型コロナウイルスの感染拡大予防対策を行い、活動しています（体験学習ボランティアは令和2年7月21日（火）から、展示解説ボランティアは同月28日（火）から活動開始）。御利用いただく来館者の皆様には、大変御不便をおかけしておりますが、引き続き御理解と御協力をお願いいたします。

■展示解説ボランティア

①展示解説の実施方法

「3密」回避のため、主に次のような対策を行っています。

- ・活動中のマスク着用の義務化。
- ・来館者とのソーシャルディスタンスの確保。
- ・定時解説の休止（来館者に参加を呼びかけて行う定時解説は、参加者が不特定の集団となるため休止し、観覧者から希望があった場合に行うフリー解説のみとしました）。
- ・参加者の人数制限（マスク着用・距離確保の上で大声を出さずに聞き取れる人数として、解説1回につき、同一グループの5人を上限としました）。
- ・解説時間の制限（濃厚接触を避けるため、原則1回5分程度のポイント解説を行うこととしました）。
- ・土器キットを使用したハンズオン解説の休止。



展示解説ボランティア待機場所の一例

②ボランティアの感染防止対策

ボランティア自身の感染予防については、主に次のような対策を行っています。

- ・体調管理の徹底、体調不良時の活動自粛の要請。
- ・1日の活動人数上限の設定（3人）。
- ・活動時間の短縮（交通ラッシュ時の移動を避けられるよう、10時～15時半に短縮しています）。

- ・待機場所の分散（ボランティア同士の濃厚接触を極力回避するため、1人ずつ離れた待機場所を設けています）。

（展示担当 根ヶ山泰史）

■体験学習ボランティア

①体験活動の実施方法

- ・活動内容を再考して、来館者もボランティアも安心・安全に活動できるようにコロナ対策マニュアルを作成しました。
- ・これまで来館者がいつでも参加できた体験活動を予約制にして、ものづくり工房に滞在できる最大人数を定めて「密」にならないように配慮します。
- ・来館者と解説をするボランティアとのソーシャルディスタンスを確保するために立ち位置を床に明示しています。また距離感覚を実感してもらうため、床に2m間隔を表示しています。
- ・各テーブルに消毒液を設置し、来館者を補助する前後に手指の消毒を行うことを徹底しています。
- ・来館者が使用した道具は、使い捨ての物を除き、全て洗剤を使用して洗浄し、その日の内には再利用しないようにしています。

②ボランティアの感染防止対策

ボランティア自身の感染予防については、活動再開前に研修を行い、研修を受けていないボランティアについて活動不可として、意識を徹底しています。



感染防止対策研修の様子

密を避け、少人数で実施された研修ですが、参加したボランティアが真剣に研修を受講し、積極的に質問をしたり、改善点を提案したりする姿が印象的でした。

（学習支援担当 佐藤昌幸）

コロナ禍における学校団体受入れへの取組

当館では、校外学習の場として毎年100校を超える学校団体の受入れをしております。特に、小学3年生や4年生、小・中学校特別支援学級での御利用が多く、「体験的に学ぶことができる」「専門的な話を聞くことができる」「雨天でも実施できる」と、館を利用された先生方や児童生徒の皆様にご満足いただいております。

しかし今年度は、緊急事態宣言による休校と当館の臨時休館のため、5・6月の受入れ予定校は来館中止となってしまいました。学校団体の受入れをどうしたら安全に再開できるのか、手探り状態の中で議論を重ね、「3密」を回避することを前提に、これまでのプログラム内容の見直し・変更、入退館の仕方、館内での動線等について検証し、9月再開の措置となりました。以下、コロナ禍での学校団体対応について御紹介します。

■ 3密回避を考慮した受入れ態勢

①密閉（換気の徹底）

当館では、空調システムによる外気の導入、ゆめ・体験ひろばの自動ドア開放、扇風機の利用等により換気しています。また、雨天時等の昼食場所として講堂の貸出を行っていましたが、開放できる窓がなく昼食場所としては不適切という観点から、貸出し休止の措置をとっています。

②密集（人数制限・活動場所の確保）

まず、ゆめ・体験ひろばの面積、展示室見学時の人数、体験場所でのソーシャルディスタンスの確保等を考慮し、学校団体受入れ人数は100名を上限としました。100名以上の学校へは、分散実施を提案させていただきました。

また、館内活動時の密を避けるため、少人数グループを編成し、集合場所を分散させ大人数で集まらないよう工夫しました。そのため、クラスを解体して活動した学校も多数ありました。また、到着後のガイダンス、退館後のあいさつ等、全員が集合することは極力屋外で実施しました。

③密接（プログラムの見直し・変更）

【展示室見学】

これまでの見学には、展示解説ボランティアによる解説がりましたが、これは休止し、ワークシートを使った見学に変更しました。少人数見学にな

り、ソーシャルディスタンスをとった見学が可能となりました。

【火おこし体験→火おこし実演】

これまでは、全員がマイギリ式発火具を使う体験をするプログラムでしたが、ボランティアとの至近距離での対面を回避するため、火おこしの歴史とその道具について解説し、発火するところまでの実演を見るプログラムに変更しました。



火おこし実演の様子

【昔の道具体験】

3学年での昔の道具体験はとても学習効果の高いもので、多くの先生方に好評いただいております。道具の共用という問題がありましたが、各体験場所にアルコール消毒を設置し、道具に触れる前に児童が消毒できるようにしました。また、休憩時間を例年より5分増やし、手洗時間を確保しています。

■ 感染しない・させないために

御紹介してきた対策の他にも、ボランティア人数の制限、入館時の検温と手指のアルコール消毒、まが玉づくり体験等ではパーテーションの活用等、考えられることやできる対策を講じてきました。コロナ禍の今年度でも、25校の学校に御利用いただけたのは、学校の御理解と御協力があったからだと思えます。自粛生活下の久々の校外学習に、目を輝かせ楽しそうに取り組む子供たちの様子を見て、受入れが再開できたことに安堵し、今後も感染しない、感染させない、より一層満足感のある活動を考えていきたいと感じました。また、様々な制限によりお断りをした学校や校外学習を中止せざるを得ない学校も多数ありました。より多くの学校にまた御利用いただけるよう、来年度に向けて準備をしていきたいと思えます。（学習支援担当 松木綾子）

コロナ禍におけるイベントの取組

例年、当館では、5月の大盆栽祭りや秋の大宮区民フェスティバル、北区民祭りなど地域のイベントに参加したり、講座の開講や正月のイベント開催などにより、当館のPRを図ってきました。

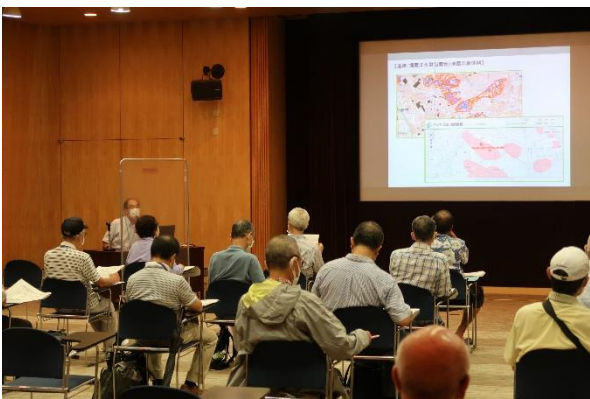
しかし今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため参加予定イベントの中止が相次ぎ、当館のイベントも中止や延期が相次ぎました。こうした中で取り組んできたことを御紹介します。

歴史民俗講座

歴史民俗講座は主に当館に在籍する学芸員が自分の専門や、特別展・企画展に関する内容を発表する講座で、年5回開催しています。内容は考古・歴史・民俗・美術と多岐に亘っており、毎回好評を博しています。

令和2年度は上半期の講座は全て延期し、11月の講座から再開しました。講堂の定員は162名ですが、再開当初は定員を48名としました。座席の間隔を空け、講師の演台の前には飛沫防止用のパネルを設置しました。またマイクの使いまわしを避けるため、講義後の質問は受け付けないこととしました。こうした対応は概ね御理解いただけたと思います。

その後、感染者の減少と共に、定員を81名まで増やしました。しかし、講座によっては申込開始日に満員になってしまうこともあり、申込希望者をお断りすることもありました。



(歴史民俗講座の様子)

正月開館イベント「博物館でお正月」

当館は1月2日から開館し、お正月ならではのイベントを開催しています。この「博物館でお正月」では、職員がコバトンの着ぐるみを着たり、獅子舞

に扮してお客様をお迎えしていました。しかし、着ぐるみは新型コロナウイルス対策で貸出し禁止になり、獅子舞も複数の職員が1つの獅子頭を被ったり、獅子が来館者の頭を噛んだりすることは感染対策上難しいと判断し、獅子頭を館内に展示することにしました。

また正月特別体験では、羽根つきや投扇興で遊ぶことが出来ますが、道具を1回ごとに消毒し、体験できる内容を例年より少なくし、密にならないように気を付けました。(体験ひろばの取組の詳細は5・6ページをご覧ください。)

このように対策を考えながら準備をしていた正月開館イベントですが、12月後半からの急激な感染者の拡大を受けて、当館は12月24日から臨時休館になり、イベントも中止になりました。

正月開館イベントでは県立大宮光陵高等学校書道科の生徒さんの協力を得て、館内に飾る賀詞揮毫を製作して頂いています。今年も素晴らしい作品を製作して頂きましたが、臨時休館となり皆様に見てもらうことができませんでした。

そのため、多くの方に見て頂くために、今年は当館のホームページやSNSで作品を公開いたしました。

イベントのための準備をし、できる限りの新型コロナウイルスへの対策を進めたところで、イベントが中止となるが多かった1年でした。

歴史民俗講座は、再開当初はお客様が来てくれるのだろうかと不安に思っていたのですが、受付初日にたくさんの申込があり、安心したことを今でも覚えています。お客様から講座再開を楽しみにしていたというお声かけを頂き、楽しみにしてくださっていた方がいた事に勇気づけられました。

再開後も感染者数の増減を気にしながら、開催できるかどうか判断してきました。年明けの講座は臨時休館中ということもあり、2講座が中止となりました。来年度も新型コロナウイルスの対策は必須だと思いますが、今年度の経験を踏まえてより感染対策を充実させて、皆様に安心して御参加いただけるように取り組みたいと思います。

(企画担当 倉澤麻由子)